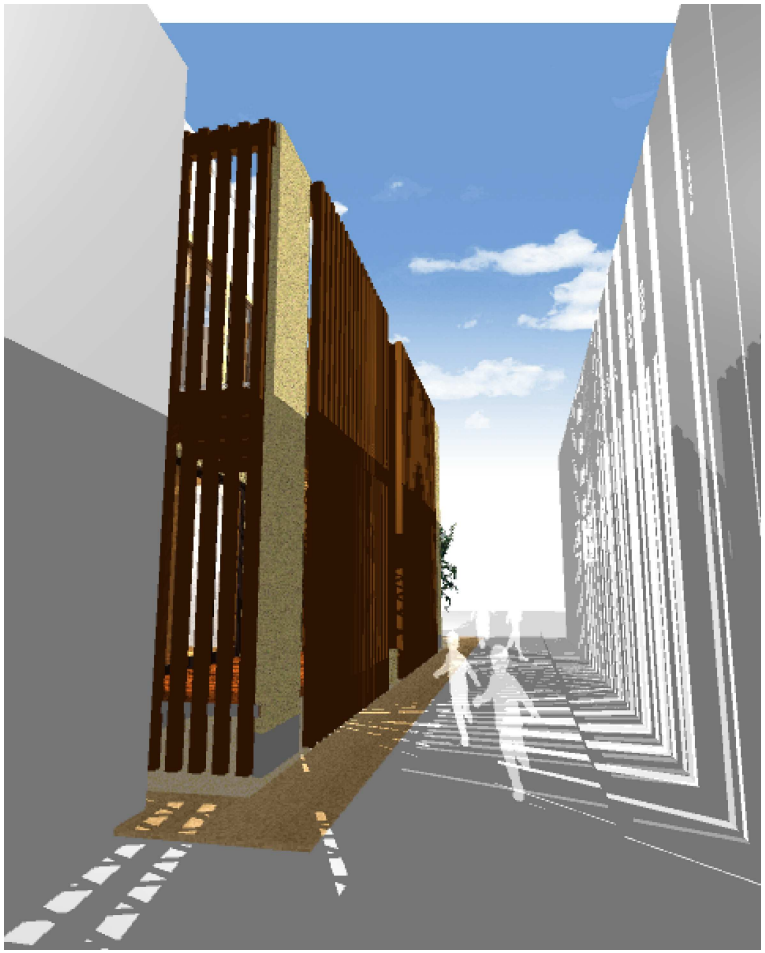
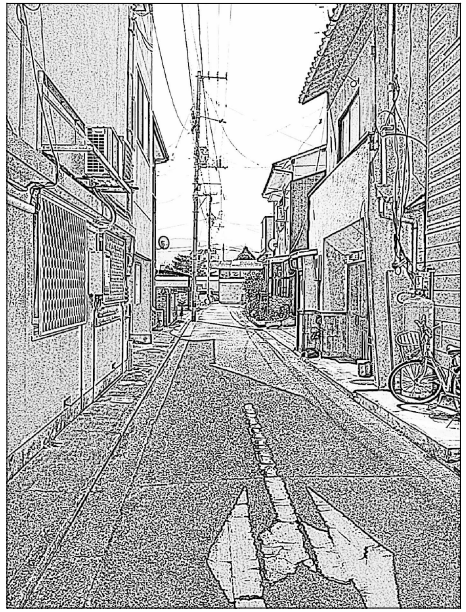
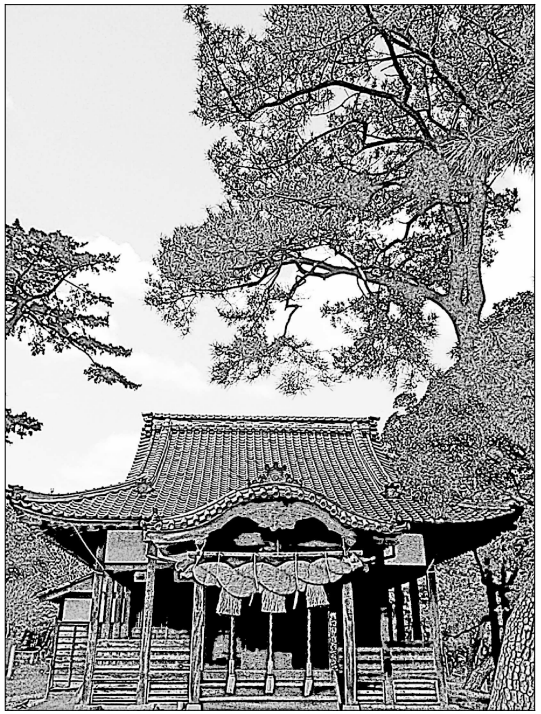


港町の家

2013. 3. 20



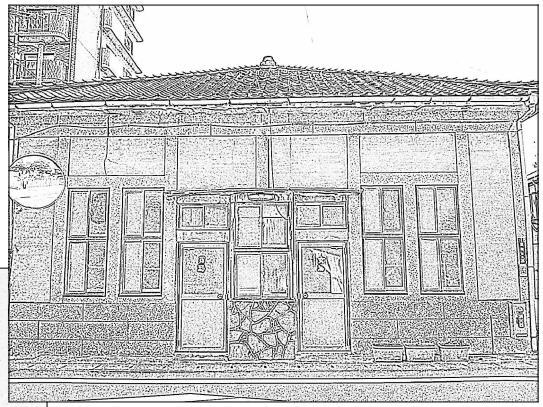


どこか懐かしさを感じさせる路地裏

■コンセプト

「繋がる」

過去ー現在ー未来
家の内と外　家と地域
家族　親と子



かつての人々の暮らしを垣間見ることができる
歴史情緒のある建物があちらこちらに残る街並み

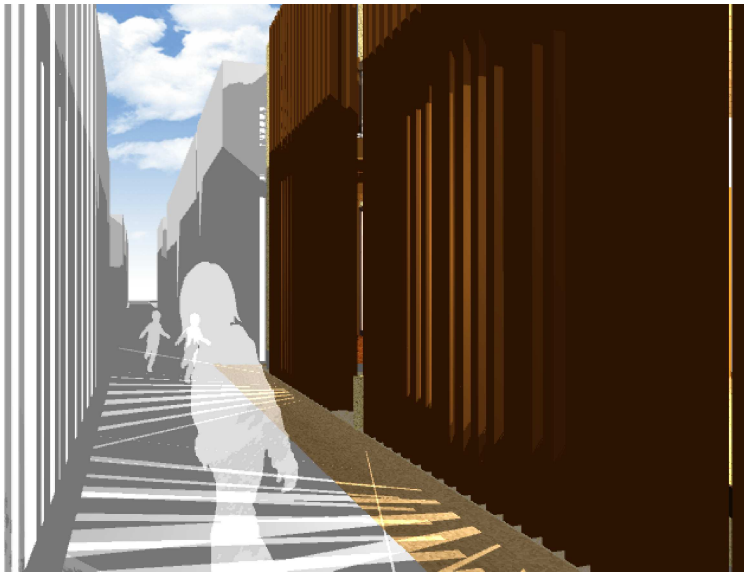
南側外観

路地裏の雰囲気を大切にする
区画して閉鎖的にするよりも、緩やかに敷地と周辺環境が繋がる感じ。
路地裏で子供たちが遊ぶ様子が思い浮かんだ。

下町、路地裏、ノスタルジア。

南側外観

内と外をうまく繋ぐ装置といえば、格子。
日本の文化を継承しつつ、次の時代を見つめるデザイン。



南側路地裏の雰囲気

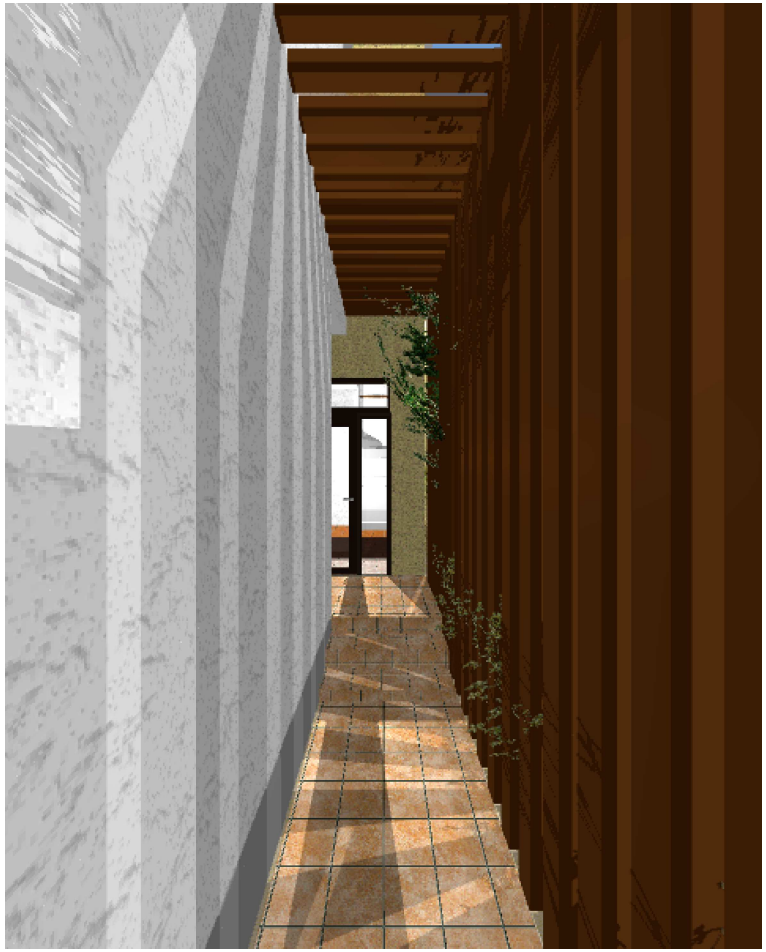
ノスタルジー、下町、路地裏、郷愁、セピア色・・・・とくれば、ベージュだ。

南側外観

東側外観

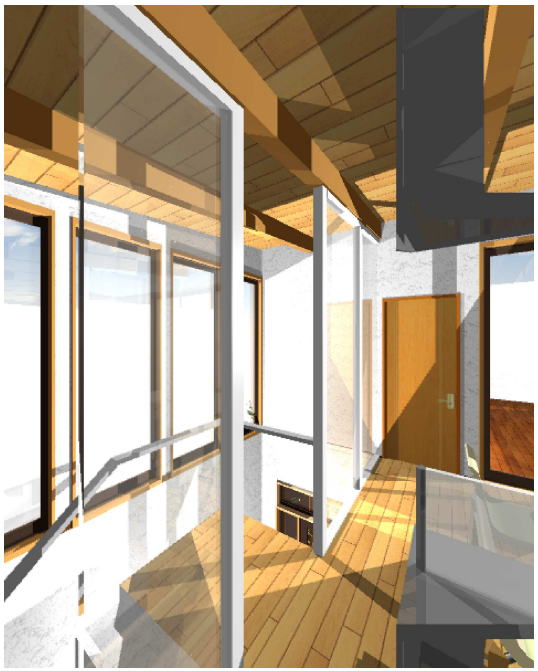
東側外観

北側外観



玄関へ続くアプローチ

格子のアーチの間から、青空がのぞき光が差し込む。
まるで、森の中の木漏れ日のような雰囲気。
過去・現在・未来、家族、時間と空間を繋ぐゲートのイメージ



内観

1階と2階の空間的なつながりを創り出す玄関ホールと階段。
屋上テラスは、周辺環境から切り離されたプライベート空間。
周辺環境と繋がりつつ、プライベート性を確保する。

アプローチから家の中を通り過ぎて庭まで見通せる。
開放性の表現と、路地裏の雰囲気の表現。

1階と2階の空間を繋ぐ。

■子供部屋の開放性と閉鎖性
思春期には、自立心が芽生えて親に干渉されない自分だけのテリトリーが欲しくなる。
とはいえ、部屋を与えると閉じ籠って目が届かない心配がある。
目が届くところに置きたいというのは、親側の都合で、いい換えれば子供を信頼し自主性を尊重するという考えと相反するのだが。
部屋という十分な空間は与えず、最小限の空間だけにテリトリーを限定する。たとえば、ベッドスペースだけとか。

■階段はただ昇り降りするためだけのものなのか。
階段が家に二つ存在するというのは、スペースが無駄になると考えるのが一般的。
一般的な価値観に囚われない自由なプラン。
階段の使い道、多様な可能性を考える。

リビング内階段にしても、会談は昇り降りするもので通行する一瞬しか使われない。
それは1階と2階の各部屋が独立してしまっているから。

リビングと子供部屋の連続性というものはほとんどないだろう。もし、そうでない空間としての連続性や
一体感がつくられれば、そこを繋ぐ階段は一瞬の利用ではなく、

たとえばリビングとダイニングの境界のような曖昧さのように、リビングと子供部屋の曖昧な空間として
滞在できる場所になるのではないだろうか。

■畳敷きの部屋
子供が幼少期は、リビングに布団を敷いて寝られるほうがいい。

リビングは畳敷きの方が、遮音性があるし幼児が転んだりおもちゃを投げたり落としたりする衝撃緩和など、
いろいろな場面への対応力がある。

■子供部屋を考える
子供部屋が一番可変性を考えないといけない。
子供は成長に応じて精神も体力も、体のサイズも変化していき、やがて巣だっていくのだから。

41-9-1　ウッドデッキ